◆変化を必要としていること、変化していることへの感受性が歴史を必要とさせる

前回書いた「特殊なもの」の最たるものの一つが、戦争だろう。それこそ変わらない日常に大きな断絶をもたらす、人の世の「変わったもの」の極みである。そして戦争は、「時に感じては花にも涙を濺ぎ」（春望）というように、周りの風景を一変させるとともに、自らのありようを回顧することと関連している。

古来、歴史が書かれるきっかけには戦争･戦乱やその体験があった。戦争をきっかけに、強大な力で人びとの運命を押し流してゆく「歴史」の語りが促されたり、その流れに抗し、あるいはそのことに納得するために人びとの「体験」の語りが促されたりしたわけである。

巨大な暴力の発動たる戦争が人間の営みとして例外的な状態であるにしても、読めば読むほど、むしろ歴史の記述は戦争で一杯である。そのくらい人の世において「戦争」と「歴史」の結びつきは本質的である。そしてそれらは我々が多かれ少なかれ「群れて」暮らしていること自体とも関わっている。「歴史」と「戦争」と「社会」のトライアングルはつねに考えておくようにしよう。それについてはまた書く機会があるはずである。

ともあれ、「平凡」より「特殊」に関心を示す歴史は、「日常」よりも「非日常」とより強く結びつく傾向を持っている。それは「変化」との結びつきといってもよい。

つまり変化への感受性、あるいは変わろうとする意志が人に歴史を必要とさせるわけである。逆にいえば、変化への感受性がなく、「あたりまえ」が延々と続くところに歴史の必要はない。変化のないところでは、当事者たちの自覚がないままに、驚くほどの時間が過ぎてゆく。それは後から見れば、「停滞」と表現することができるようなものだ。けれどもその当事者たち自身はそれを知ることができないところ、必ずしも不幸だと思っていないところがミソである。

大学時代に弓道をして過ごした道場に卒業後 10 年してから訪れて、その変化のなさに驚いたことがある。大学を卒業しての 10 年は自分にとって特に変化の激しい時期であったから、その分その経験との対比による道場の「変わらなさ」が鮮やかだった。建物全体や大きな家具など、ハードに位置が定められているものが変わらないのは仕方がないにしても、壁に固定されず床に置かれ立てかけられているだけの黒板や小さな文机の位置など、ちょっとした工夫で場所を変えても良いようなもの、あるいはそれらの使われ方などが醸し出す「空気」といった、ちょっと形容しがたいものも含めて、変わることがなかったのである。

その道場で過ごしたのは大学時代のほぼ三年間。その後も部員は次々と入れ替わったはずだけれども、一人として変化の「無さ」に気づくことはない。「そういうものだから、そういうもの。」という細切れの時間の積み重ね、毎日繰り返される丁寧な稽古が、結果的に驚くほど長い間にわたる「変わらないもの」を生み出すわけである。

それは伝統を守る、などという大げさなものによる結果ではない。「伝統だ」などという言い方は何処か不自然だ。むしろそうした言い方がなされるときは、「伝統」が「＝守るべ

きもの」として見出されてしまっている場合である。つまりそれが変化にさらされ、多かれ少なかれ保存の危機に瀕しているというときにこそ、「伝統」などという言い方がなされるということである。（あるいは現在の必要から「保存されるべき伝統」が新たに創造されることさえある）

そうではなく、本当に変わらないものは、むしろそう意識さえされないことのほうが多い。特別なものだというような意識を全く欠いたまま、無自覚に、淡々と、そして静かに時は過ぎてゆく。そして、そのようなところに歴史は求められない。

前回述べた「特殊なもの」としての記録、それにより成立する歴史ということを考えれば、人の営みの膨大さに比べ、記録されているものはごくわずかである。久しぶりに訪れた道場の壁にも、少し上の世代が達成した都学連二部昇格の賞状が自分たちのいた頃と変わらず誇らしげに飾られていた。彼らのあと、二部で強敵とそれなりに戦った自分たちの世代の活動の記録は、遺されていない。そうした数少ない記録から、この場でなされた数々の営みを想像することはなかなかできないだろう。

歴史を考えるとき、私たちの社会のメンバーもいわばこの部活のように、「卒業」によって確実に入れ替わり、過去一度として同じだったことはない。時間の流れの全体を経験できる人はいない。記録されたものはさらにその一部に過ぎない。

そうすると、歴史とは「変化」や「特殊」による膨大な経験の切り捨てであり、取捨選択による情報の整理ということになる。だとすれば、「歴史を体感する」などというのは要するに、膨大な「経験」を捨て去っている歴史を「実感」する試みのことである。どだい無理なことを提案しているようにもみえる。

逆に言えば、そもそもなぜ「歴史を体感する」必要があるのか。あるいは、「歴史」に関してそう言わなければならない現在の状況は、いかなるものなのか。それについて述べておかなければなるまい。

ただそのまえに強調しておきたいのは、今回（までで）述べたように、「歴史」とは、人間の知的営みのなかでも、非常に「癖」のあるものの一つだということである。社会学の悪い癖かも知れないが、それを精確に捉えるためにも、半分くらいは意地悪な目で「歴史」を見る必要があると思われる。

それは人々の営みとしての「日常」を大事になんか扱わないし、（「忘れないこと」ではなく）「忘れること」を本質的な要件にしている。事実が集められ丁寧に配列されたものであることはいうまでもないが、（前々回述べたように）事実でありながら、そのことと、その配列がある選択によるものであること、つまり妥当性をめぐる特定の判断のもとにあることとは矛盾しない。そうした本質に目をつむって歴史がそもそも始めから人にとって「善なるもの」であるというのは予断である。捨てるべきだ。

歴史を持たない社会のほうが幸福な社会であるとさえいえるかもしれないのである。これもまた、「歴史を体感する」ために必要な判断材料だと考える。